



## 中伊豆リハビリテーションセンター 50周年記念誌

### 〈訪問看護ステーションあおぞら〉

静岡県駿東郡長泉町下土狩1293-1 JAふじ伊豆下土狩ビル3F

- 訪問看護(リハビリ)事業  
TEL.055-986-8046 FAX.055-986-8101

### 〈訪問看護ステーションあおぞら伊豆〉

静岡県伊豆の国市田京654-1

- 訪問看護(リハビリ)事業  
TEL.0558-77-2211 FAX.0558-77-2212

### 〈訪問看護ステーションそよかぜ熱海出張所〉

静岡県熱海市紅葉が丘4-3 メイプルビルズ1F

- 訪問看護(リハビリ)事業  
TEL.0557-86-5101 FAX.0557-86-5103

### 〈伊東の丘事業所〉

静岡県伊東市岡1349-3

- 生活介護施設 [伊東の丘いずみ]  
TEL.0557-36-6375 FAX.0557-36-6396
- 通所介護事業 [デイサービス伊東の丘きらめぎ]  
TEL.0557-36-6381 FAX.0557-36-6397
- 訪問看護(リハビリ)事業
- 居宅介護支援事業 [訪問看護ステーションそよかぜ]  
TEL.0557-36-1530 FAX.0557-32-3323
- 訪問介護事業 [伊東の丘ヘルパステーション]  
TEL.0557-36-1546 FAX.0557-32-3323

### 〈中伊豆リハビリテーションセンター〉

静岡県伊豆市冷川1523-108

- リハビリテーション専門病院  
TEL.0558-83-2111 FAX.0558-83-2370
- 駿東田方地域リハビリテーション広域支援センター  
TEL.0558-83-2115
- 障害福祉サービス  
自立訓練施設 [さわらび]  
生活介護施設 [わかば]  
就労支援事業 [あゆみ]  
TEL.0558-83-2117
- 相談支援事業 [障害者生活支援センターなかいずりハ]
- 高次脳機能障害支援拠点機関 (駿東田方・熱海伊東圏域)



社会福祉法人農協共済  
中伊豆リハビリテーションセンター

<https://www.janrc.or.jp>



中伊豆リハ



伊東の丘





# 中伊豆リハビリテーションセンターは、 2023年に創立50周年を迎えました。

昭和48年に開設された中伊豆リハビリテーションセンターは、  
交通事故などによって障害をもたれた方々の  
地域社会への早期復帰をサポートしつづけて、半世紀。  
医療・福祉・在宅支援の3事業の連携によって  
患者様に「切れ目のない医療福祉サービス」を  
おとどけています。

## 福祉事業

患者さまの自立訓練  
から生活介護、就労継続  
支援、相談支援を行って  
います。希望に応じて施設へ  
の入所も可能です。

## 在宅支援事業

訪問看護ステーション、  
通所介護、居宅介護支援、訪  
問介護などにより、リハビリ  
テーション終了後の在宅復  
帰を支援しています。

## 医療事業

### 回復期リハビリテーション

交通事故による外傷や  
脳血管疾患などにより障害を持  
たれた方々の社会復帰を支援する  
ための回復期リハビリテーションを行  
っています。また「医療」・「福祉」・「介護」  
の連携によって患者さまが自立した  
生活を送れるよう切れ目のない  
支援を展開しています。



経営理念

Management philosophy

想いに寄り添い

心と技術でささえ

地域と未来につなぐ

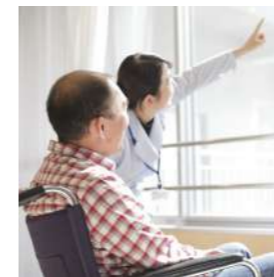
経営方針

Management policy

生活の充実と  
心の安らぎを支援します。

最高の技術と心で  
リハビリテーションを提供します。

自己研鑽と情報発信に努め  
社会に還元します。



CONTENTS [目次]

導入	1
経営理念・経営方針	3
50年の歴史	5
センター長ご挨拶	7
組織図	8
部長ご挨拶	9
部署のご紹介	
事務部	11
診療部	12
リハビリテーション部	13
看護部	15
地域連携推進部	17
福祉部	21
伊東の丘事業部	26

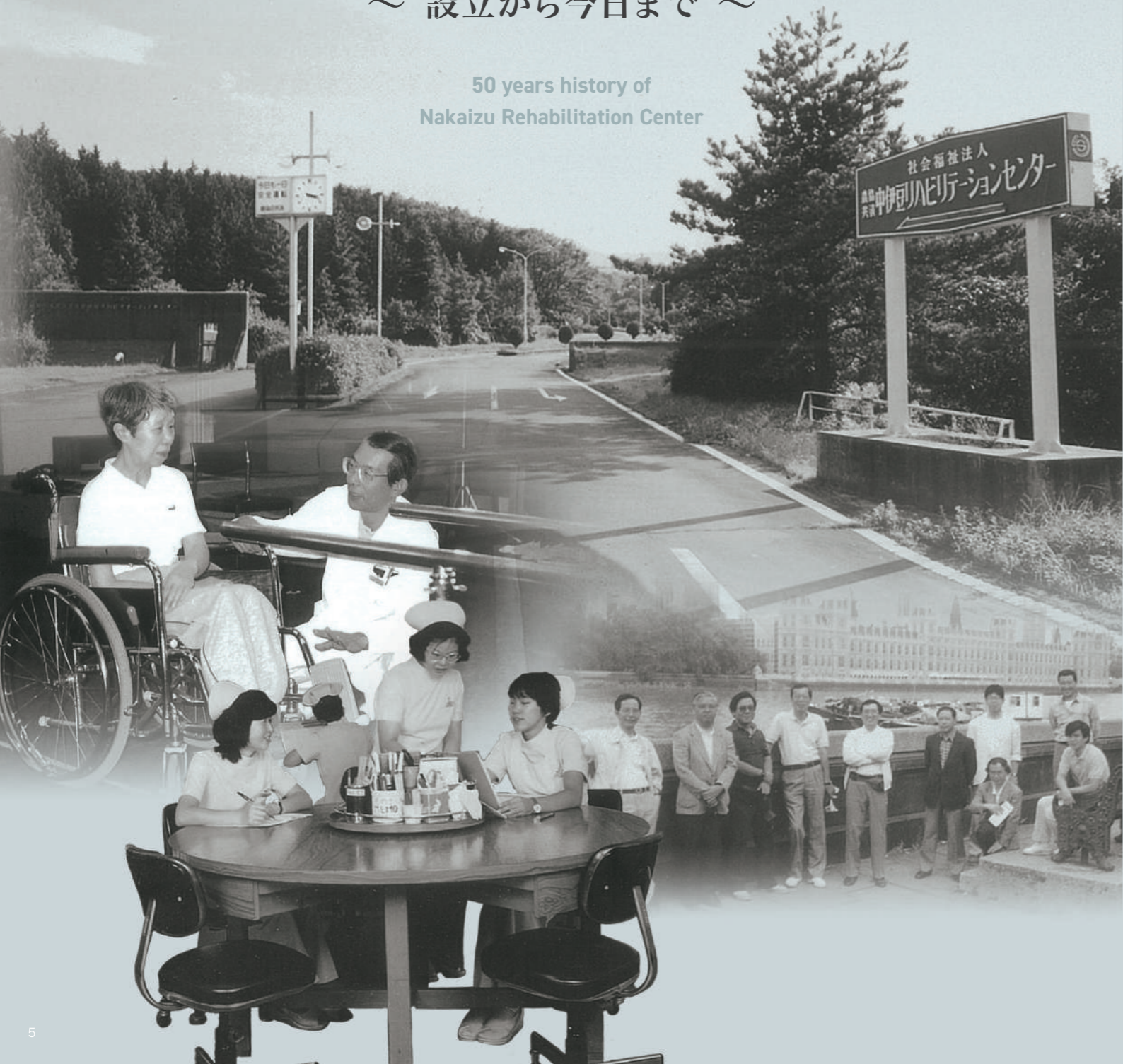


中伊豆リハビリテーションセンター

# 50年の歴史

～ 設立から今日まで ～

50 years history of  
Nakaizu Rehabilitation Center



- 昭和47年1月4日
- 昭和47年1月21日
- 昭和47年12月25日
- 昭和48年4月23日
- 昭和48年6月1日
- 昭和48年9月1日
- 昭和51年9月21日
- 昭和51年10月1日
- 昭和52年4月1日
- 昭和54年2月23日
- 昭和55年10月1日
- 昭和60年4月30日
- 昭和63年1月5日
- 平成4年4月1日
- 平成6年1月1日
- 平成8年5月1日
- 平成10年3月1日
- 平成11年9月1日
- 平成12年4月1日
- 平成13年7月1日
- 平成14年9月1日
- 平成14年11月1日
- 平成15年4月1日
- 平成18年7月1日
- 平成21年9月1日
- 平成23年4月1日
- 平成23年9月1日
- 平成24年4月1日
- 平成24年12月1日
- 平成25年4月1日
- 平成28年4月1日
- 平成29年6月22日
- 平成30年4月1日
- 平成30年9月1日
- 令和2年8月1日
- 令和5年4月1日
- 令和6年2月23日

昭和  
平成  
令和

社会福祉法人の設立許可を受ける。  
 瀧澤 敏 (JA共済連会長) が初代理事長に就任。  
 病院の開設許可を受ける。(100床)  
 病院構造設備の使用許可を受ける。(竣工)  
 保険医療機関・身体障害者収容委託施設の指定をうける。  
 重度更生施設事業を開始。(50名)  
 入院病床数を100床から110床へ増床。  
 重度更生施設の定員を50名から70名に変更。  
 重度更生施設の定員を70名から90名に変更。  
 入院病床数を110床から122床へ増床。  
 重度授産施設事業を開始。(50名)  
 重度更生施設の定員を90名から80名に変更。  
 入院病床数を122床から130床へ増床。  
 日本リハ医学会専門医研修施設の認定を受ける。  
 身体障害者療護施設事業を開始。(30名)  
 リハビリテーション総合承認施設の承認を受ける。  
 入院病床数を130床から158床へ増床。  
 訪問看護ステーション「あおぞら」を開設。  
 訪問看護ステーション「そよかぜ」を開設。  
 通所リハビリテーション「やすらぎ」を開設。  
 入院病床50床を回復期リハビリテーション病棟へ転換。  
 回復期リハビリテーション病棟50床を104床に増床。  
 訪問看護ステーション「そよかぜ」熱海サテライトを開設。  
 身体障害者療護施設の定員を30名から40名に変更。  
 伊東の丘事業所 (クリニック、福祉施設、通所リハ) を開設。  
 重度授産施設を障害者支援施設あゆみへ移行。(40名)  
 重度更生施設を障害者支援施設さわらびへ移行。(54名)  
 身体障害者療護施設を障害者支援施設わかばへ移行。(60名)  
 障害者支援施設さわらびの定員数を54名から40名に変更。  
 障害者支援施設あゆみの定員数を40名から20名に変更。  
 伊東の丘福祉施設を障害者支援施設伊東の丘へ移行。(40名)  
 診療部門において無料低額診療事業を導入。  
 障害者支援施設さわらびの定員数を40名から34名に変更。  
 伊東の丘通所リハをデイサービス伊東の丘きらめきに変更。  
 訪問看護ステーション「あおぞら」伊豆サテライトを開設。  
 「回復期リハビリテーション病棟入院料1」施設基準算定届出。  
 「回復期リハビリテーション病棟入院料2」施設基準算定届出。  
 在宅支援部居宅サービス1課を「あおぞら」伊豆出張所へ移行。  
 「回復期リハビリテーション病棟入院料1」施設基準算定届出。  
 伊豆サテライトから訪問看護ステーション「あおぞら伊豆」に変更。  
 障害者支援施設「わかば」が天皇陛下より御下賜金を拝受。



創立10周年記念式典

# センター長 ご挨拶

Greetings from the Center Manager

自然環境の厳しさと闘い、  
医療制度の変遷の都度  
スタッフ全員の努力で乗り切り、  
進化を続けてきました。

社会福祉法人  
農協共済中伊豆リハビリテーションセンター

センター長 吉野 邦英



1973年4月に設立された当センターが50周年記念誌を発行することになりました。50年という年月の重さをかみしめながらセンターの現在と将来についての思いを記したいと思います。

10年、20年、30年記念誌を拝読しますと、先達のご苦労、意気込みがひしひしと伝わって来ます。自然環境の厳しさ（これはある意味美しさの裏返しでもあるのですが）と闘い、医療制度の変遷の都度スタッフ全員の努力で乗り切り、進化を続けてきました。当センターは「医療」、「福祉」、「在宅支援」の3事業を運営しています。医療としては回復期リハビリテーション病棟の運営がメインです。入院患者様はすべて急性期病院からの紹介です。しかし闇雲にすべての患者様を受け入れているわけではありません。入院してリハビリを続けられる全身状態、精神状態、社会的状態にあるのかを、当センターの基準に照らしてしっかりと審査を行っています。可の判定が出たら地域連携室が紹介元の病院と交渉し、入院日の設定となります。これには病棟の病床状況が影響します。入・退院の調整です。これには患者様のリハビリの回復度（FIMの上昇度）が影響します。リハビリの回復には患者様の全身状態、精神面の安定・意欲が大きく関係します。全身状態は医師による全身管理、看護師によるバイタルサインのチェックをはじめとした細かい観察、介護士による快適な入院生活の提供、栄養士による栄養状態の改善、薬剤師による薬剤の管理など、多職種による協力があってはじめていい状態を維持できます。そのうえで訓練士が患者様の意欲をかきたてるプログラムを作り実践していく。この基本を改めて再確認し、徹底したいと思います。

当センターでは設立間もないころより福祉に力を注いできました。現在当センターには障害者支援施設「さわらび」、障害者支援施設「わかば」、「伊東の丘いずみ」、就労継続

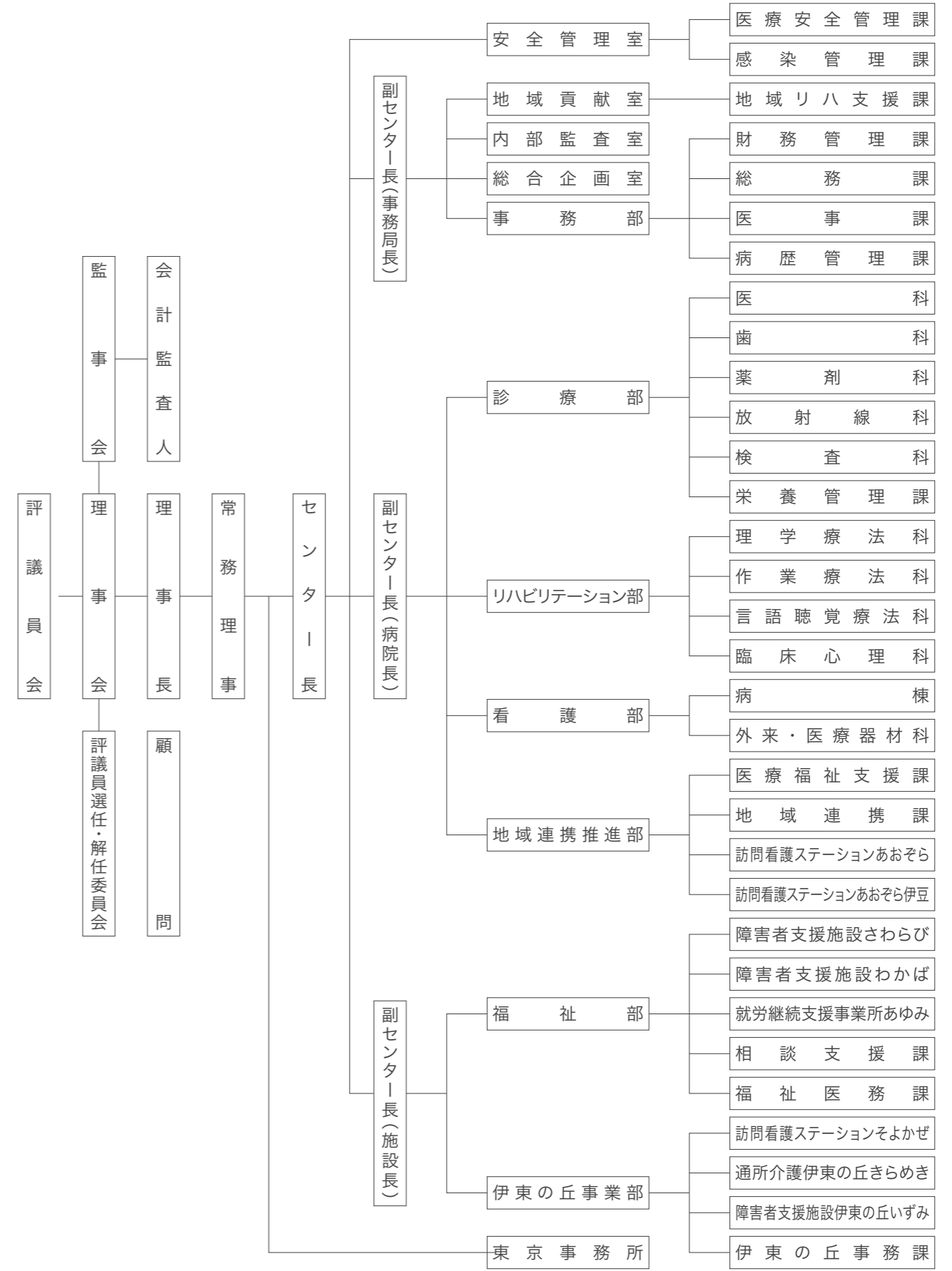
支援B型事業所「あゆみ」があります。さわらびは、自立訓練事業、生活介護事業、施設入所支援事業の3つの事業を柱に、「障害があっても自分らしく生きたい」を支援しています。とくに就労訓練には力を注ぎ、回復期リハを終了後もリハビリの継続を可能としています。わかばと伊東の丘いずみは障害者総合支援法に基づき、常時介護を必要とし、家庭での生活が困難な障害者の方が利用されています。スタッフとの付き合いも長いため少しの変化も見逃されることがなく、時には救急搬送されることもありますが、再び元気になって戻ってこられています。あゆみは障害があっても「働きたい」を応援する事業所で、送迎マイクロバスを利用して通いで多数の方が利用されています。洗濯工房、印刷工房、おむすび工房、農園芸環境整備工房、山の工房などで働かれています。

当センターのもう一つのかなめは在宅支援です。住み慣れた地域で自分らしい生き方をいつまでもしたいという想いを実現できるようお手伝いをします。通所介護「伊東の丘きらめき」、訪問看護ステーション「あおぞら」、「あおぞら伊豆」、「そよかぜ」、居宅介護支援事業、ヘルパーステーションの事業所などを通じて、退院後の在宅生活における切れ目のないサービスを提供しています。

1995年に設立され、1997年より運用が開始された日本医療評価機構による病院機能評価は、既に多くの病院が認定を受けています。当センターも2025年4月に審査を受ける予定となっています。当センターはすべての病院を7つの機能種別に分類されうちリハビリテーション病院にあたり、ver.3.0の膨大な評価項目をすべて完成させ審査に臨まなければなりません。職員全員が参加し合格する必要があります。「想いに寄り添い 心と技術でささえ地域と未来につなぐ」の経営理念を胸に一致団結して乗り切りましょう。

# 組織機構図

Organizational Diagram



## 部長 ご挨拶

Greetings from the Managers



事務部長  
渡邊 達也

日本の人口ボーナス期は1950年代から1990年代半ば迄で、大きな経済成長を遂げました。こうした状況の下、1973年のリハビリテーション黎明期に当センターが創設され、2023年4月に創立50周年を迎えられましたのは、偏に、資金出資をして戴いたJA共済連及び各事業の運営に熱心に携わって頂いた先達のご尽力・ご指導の賜物と深く感謝申し上げます次第です。

この50年を振り返ってみると、大きなターニングポイントとなったのは、2000年の介護保険制度及び回復期リハビリテーション病棟の創設、そして2003年の障害福祉制度における措置制度の廃止が現在の事業の在り方を決定づけたと言えるのではないのでしょうか。

冒頭で触れた人口ボーナス終了に伴い、バブル崩壊によるデフレ経済や急速な少子高齢化の進展など、事業運営の環境は厳しい時期となっていますが、次の50年に向けた当センターの更なる進化・発展を期待します。



地域連携推進部長  
宮島 嘉津雄

先人の並みならぬ努力により、現在では復職や社会復帰を目指す若年層の患者や頸髄損傷をはじめとした重度身体障害を有する患者等広く県内全域、近県からも入院申し込みを受けている。

思いもよらぬ事故や疾病で心身に障害を負った際の不安はいかばかりであろう。まさに途方に暮れていることと推察する。安心してリハビリテーションに取り組んでいただくためにも詳細な情報収集と円滑な入院調整、入院期間・治療計画・予後の見通しなど丁寧な説明に留意している。

本人にとって退院はゴールではなく地域生活の再スタートを意味する。新しい自分らしい生活をセットアップすることはもとより、退院直後の生活混乱期に適切な状態にアジャストするまでが回復期リハビリテーションの役割といえる。訪問看護ステーションをはじめ、地域の医療介護期間との連携に努めている。今後も地域に貢献し続けるために不断の努力を続けたい。



看護部長  
大田 美穂

病院開設から長きにわたり療養型病床を展開し、平成13年には一部病床が回復期に転換されました。平成20年に療養病棟を休止、同年、回復期リハビリテーション入院料1を取得し、回復期単科の病床運用がスタートしました。

診療報酬の改定ごとにリハビリの重要性が高まる中、私たちは、リハビリ看護・ケアの専門職として、患者の自立（自律）を支援するという大きな役割を担っています。

看護部理念の一文に「患者一人ひとりのその人らしさを大切に」とあります。その方が、その人らしく生きていくことができるよう共に考え、工夫し、そして安心できる存在でありたいと願います。

今後、皆で一緒に築き上げていきたいことは、自分の大切な人が、もしもリハビリが必要になった時に一番に選びたいと思える病院になることです。これからも職員一同、力を合わせて地域に貢献できる病院づくりを目指して参ります。



リハビリテーション部長  
長畑 則子

私が中伊豆リハに就職した当時は、まだ回復期リハという概念も存在しない時代でした。養成校を卒業したばかりの私は、機能訓練だけでなく、それを活かす能力面の訓練、制度の活用等、訓練の先にある社会生活への復帰を見据えたアプローチを展開する先輩方を見て、何とか追いつきたいと日々足掻いていた事を思い出します。

リハビリには『再び適した状態になる』という意味がありますが、中伊豆リハでは患者様の生活を再構築する事を訓練を通して目指し、その為の研鑽が重ねられてきました。3次元動作解析やHAL、教習コースも備えた自動車運転評価、VF・VE評価や電気刺激を用いた嚥下リハ等、PT・OT・ST各分野の専門的な評価や訓練も時代と共に発展してきました。

訓練を提供する事が目標ではなく、その先の患者様の生活の充実こそがリハビリの目標であることを忘れず、今後も努力を重ねて参ります。



福祉部施設長  
紅野 利幸

昭和48年に重度更生施設と肢体不自由者更生施設（当時）を開設して以来50年間、様々変遷を経て現在の各種障害福祉サービスおよび法人組織としての福祉部に至っています。これまで多くの利用者・ご家族、行政諸機関、関係団体、歴代の役職員の皆様のお陰で「いま」がありますことに心から感謝申し上げます。

さて、令和6年2月23日、「農協共済中伊豆リハビリテーションセンターわかば」は天皇陛下より御下賜金拝受の栄に浴することとなりました。これまでの歴史が賜ったものと関係の皆様を重ねて御礼申し上げます。

法人創立50周年の節目にこの大きな御褒美を賜りましたことに喜びとともに気の引き締まる思いを強く抱いております。今後もこの栄誉に恥じぬよう職員一同、一層精進して参る所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。



伊東の丘事業部長  
笹原 奈緒子

50周年を迎えるにあたり、これまで、当法人を支え、尽力していただきましたすべての皆さまに改めて感謝申し上げます。50年という歳月は、福祉・介護・医療を取り巻くあり方を大きく変えました。介護保険導入・障害福祉制度は措置から契約。法制度も変革を繰り返しています。しかし、時代が変わろうとも当法人として変わらない事は、利用者・患者に対して、質の高い最新の技術と心のこもったサービスを提供するという強い理念です。

伊東の丘は、平成18年7月に、3事業が開設。平成27年にクリニックと通所リハは閉所しましたが、平成28年度より新たに通所介護きらめきとして開設して18年が経過しました。これからも、厳しい運営が予想され、また、大規模災害や感染症にも備え、対策していかなければなりません。

法人50周年を節目として、更に地域に根差した法人を目指し、サービス向上・人材育成に努めてまいります。

## 事務部

Administrative Department



## 診療部

Medical Department



### 総合企画室

総合企画室は経営・広報戦略の企画立案、経営計画・事業計画の策定ならびに実行管理、人事制度企画や要員・採用計画の策定、人材育成・能力開発計画の策定に取り組んでいます。法人に関わる各種制度を分析し、様々な戦略を立案することにより、法人の経営に寄与することができるよう努めています。



### 総務課

総務課は、事務員、運転手、保育士の11名のスタッフで、人事・労務・福利厚生に関する業務、設備点検・営繕、所轄庁への各諸手続や規程類整備に関する業務など幅広い業務を行い、職員の働きやすい環境づくりとともに患者・入所者の療養生活の充実に向けて日々取り組んでいます。



### 財務管理課

財務管理課では、日々の出納業務の他、予算・決算・固定資産の取得管理、財務状況の分析管理などの業務に取り組んでいます。社会福祉法人会計基準を順守し、正確な財務諸表の作成やディスクロージャーに取り組むなど、財務管理の観点から法人を支える業務に取り組んでいます。



### 医事課

医事課は、専門職種が行う医療行為に関する請求事務を扱う部署です。業務内容は、患者様が病院に来院された際に受付・対応する窓口業務、診療費計算及び診療報酬明細書を作成し保険者に請求する保険請求業務、病院経営に必要な医事統計業務、外来・入院の診療録管理に係る診療情報管理業務を行っています。



### 医局

現在、医局では常勤医師7名が在籍しており、回復リハビリテーション病棟および外来ならびに福祉施設において診療を行っています。これからも各部門の皆様のお力添えを賜りながら、地域に愛され患者様に喜ばれるような医療を推進してまいります。



### 歯科

当歯科は、平成元年9月に佐藤歯科医師が週2日の歯科診療を開始してから35年間で約4500人の患者様の治療に携わって参りました。現在、常勤/非常勤合わせて歯科医師3名、歯科衛生士4名が在席しております。これからも全力で皆様のお口の健康をサポートいたします。



### 薬剤科

現在薬剤師3名と事務職(看護師)1名で、主に調剤、病棟業務、医薬品の在庫管理、DI業務、医薬品安全管理業務などを行い、他にも安全管理、感染防止、褥瘡対策などに多職種と連携して関わっています。最近では病棟の配薬車セットを始めましたが、いつまでも続けることができるようにスタッフ数が安定することを祈っています。



### 検査科

創立50年を振り返ると、検査は用手法から高精度な自動化へ移り変わりました。いつの時代も速度と正確な検査結果を導き出すために研鑽を重ねてきました。検査科は今後も患者様の思いに寄り添う心を大切に、確かな結果を導く専門性の向上に努めてまいります。



### 放射線科

初代小峰科長から始まった放射線科は、2代目鈴木科長に引き継がれ、現在では3代目となりました。当初レントゲンのみから始まった当科は、のちにCTが導入され、現在では嚥下検査・運動機能検査も担っております。今後も時代に応え、チーム医療に貢献できるよう努めていきます。



### 栄養管理課

栄養管理課では、医療部門・福祉部門それぞれに管理栄養士を配置し、患者様・利用者様の喫食状況、栄養状態などを確認し、専門的な知識と技術を持って一人ひとりに合わせた栄養管理を行っています。

# リハビリテーション部

Rehabilitation Department



## 理学療法科

理学療法科では、総勢33名の個性を活かし、患者様に「最高の技術と心」を持って理学療法を提供できるよう、日々研鑽をしております。三次元動作解析装置VICONや、ロボットスーツHALをはじめとした先進機器を活用し、回復期リハビリの役割である、身体機能や動作能力の改善を可能な限り図ることで、患者様が退院後により多くの「活動」、「参加」を選択できるよう支援をしております。



## 言語聴覚療法科

言語聴覚療法科は、11名のスタッフで失語症・構音障害・高次脳機能障害等によりコミュニケーションに問題を抱える方や嚥下障害のある方に訓練を提供しています。嚥下障害に対しては、VF・VE等の評価を基に、従来の訓練に加え電気治療機器を用いた訓練も取り入れています。

その方にとって最善最良なりハビリテーションを提供できるよう心を磨き、技術の向上に努めております。



## 作業療法科

退院後の患者様が日常生活に復帰し、社会参加するために必要な目標に向け、25名のスタッフが作業療法を提供しています。上肢の運動麻痺や高次脳機能障害に対しては、先端医療機器を活用し、専門的な介入を行っています。また、自動車運転支援については、1978年(昭和48年)の開設当初から関与しており、院内に教習コースを備え、全国的にも珍しい環境で様々な自動車運転評価を実施しています。





## 看護部

Nursing Department



### [安全管理室]

#### 安全管理課

安全管理課は、各部門の医療安全担当者と協力して、患者様・利用者様の安全を第一に活動を行っています。また、職員が安全に医療やケアを提供できるように安全管理体制の整備も重要な役割になります。そして、多職種での連携が必要な場合には、センター内の各部門を横につないでいく役割も担っています。主な活動内容は、ヒヤリハット、インシデントレポートの管理と現場へのフィードバック・安全対策の検討、提案、評価・業務改善の提案・医療安全研修の企画、運営等です。報告・相談しやすい職場環境を整え『事例から学ぶ』姿勢を持ち再発防止に取り組んでいます。



#### 感染管理課

感染管理課は、センター内で感染症拡大を防ぐため、対策の検討や部署ごとの感染対策実施状況の確認等をおこなっています。この数年は新型コロナへの対応を主に行っていますが、感染症は新型コロナ以外にも数多くあります。センターを利用される方々に安心していただけるよう、安全対策の一環として、感染対策により磨きをかけていきたいと考えています。



### 2階病棟

2階病棟は毎日にぎやかで笑顔あふれる元気な職場です。看護・介護・リハスタッフと常にコミュニケーションをとり、よりよいケアとリハビリを提供できるよう協力し合いながら働いております。

当病棟では、患者様へ目標を提示し、お互いが同じ方向で進めるよう取り組んでおり、目標達成に向けて看護・介護力を発揮するべく全力投球・全力疾走しています。時には落ち込んだり悩んだりすることもあります。患者様の笑顔とありがたいお言葉がいつも励みになっています。

これからも患者様・ご家族様が笑顔で満足して退院できる病棟であり続けられるようスタッフ全員で協働していきます。

#### 外来・医療器材科

外来では、通院でリハビリテーションを受ける患者様に対するサポートを行っています。訓練前の体調確認、日常生活での困りごとへのアプローチ、また各種申請書の作成受付など、多岐にわたります。患者様の実生活での様子にふれ、患者さんに外来リハビリテーション看護として何が出来るか、考えることがあります。関連職種と連携し、患者さんに関われることは、やりがいを感じるところです。

また、医療器材科では、滅菌業務や物品の払い出しを行っています。医療器材科の職員として、患者様や利用者様に直に接することはありませんが、安全な物品の払い出しを通して、皆さまに安心していただきたいと思い、日々業務にあたっています。

### 3階病棟

3階病棟は、看護師21名、ケアワーカー9名、クラーク1名の総勢31名のメンバーが、協力して入院患者様の病棟生活を支援しています。働くスタッフの年齢が20代から70代と層が厚いことが特徴でしょうか。若者世代、子育て世代、親の介護世代とそのライフサイクルも様々で、それ故あらゆる世代の患者とその家族の想いに寄り添うことができると自負しています。コロナ禍では、入院患者様の感染はもとより、スタッフとその家族の発症により、急な勤務変更を余技なくされることも度々でしたが「お互い様ですから」と協力があればこそ乗り越えることができました。スタッフ一人ひとりへの感謝を50周年記念誌に残したいと思います。いつもありがとうございます。

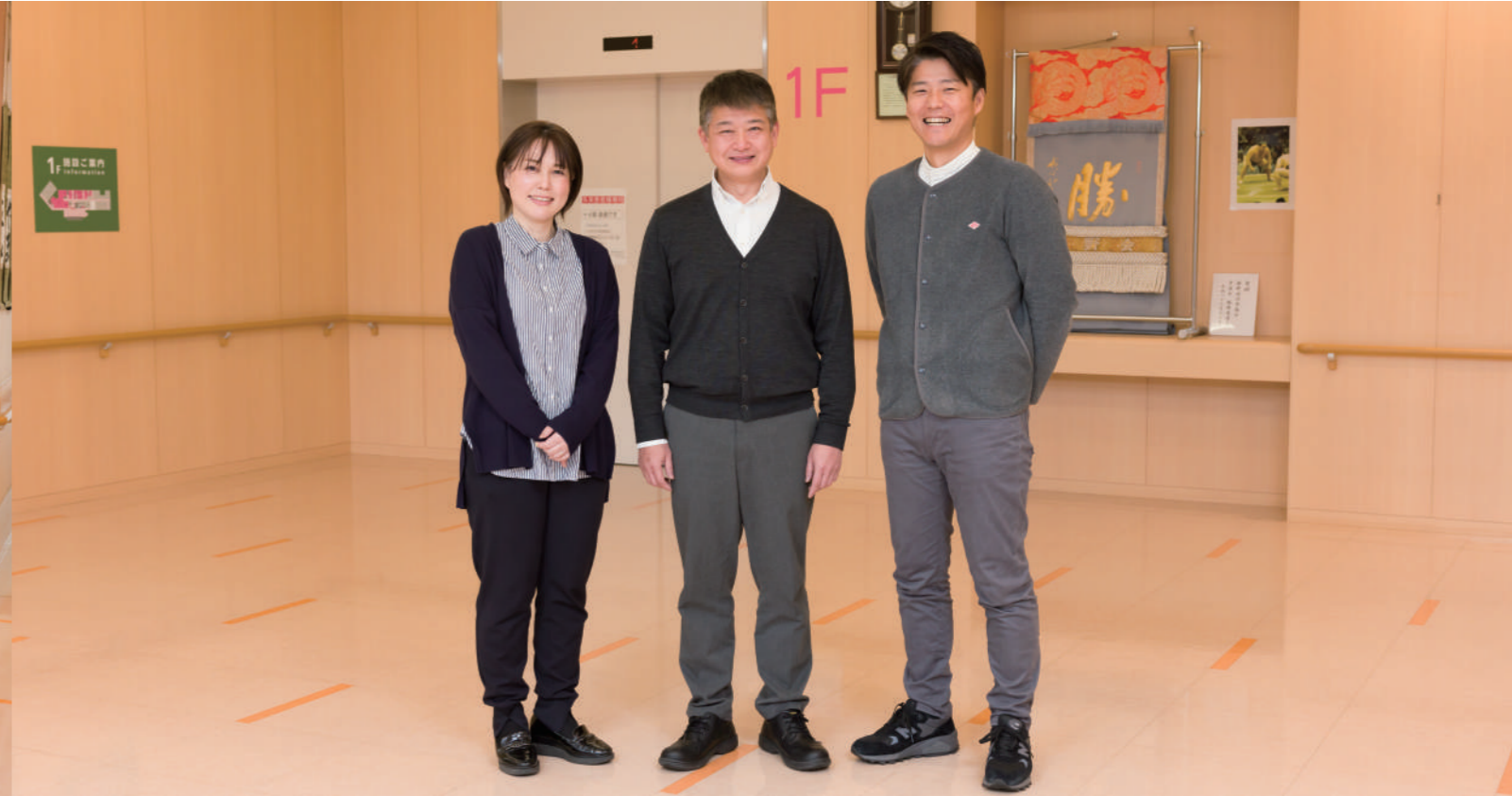
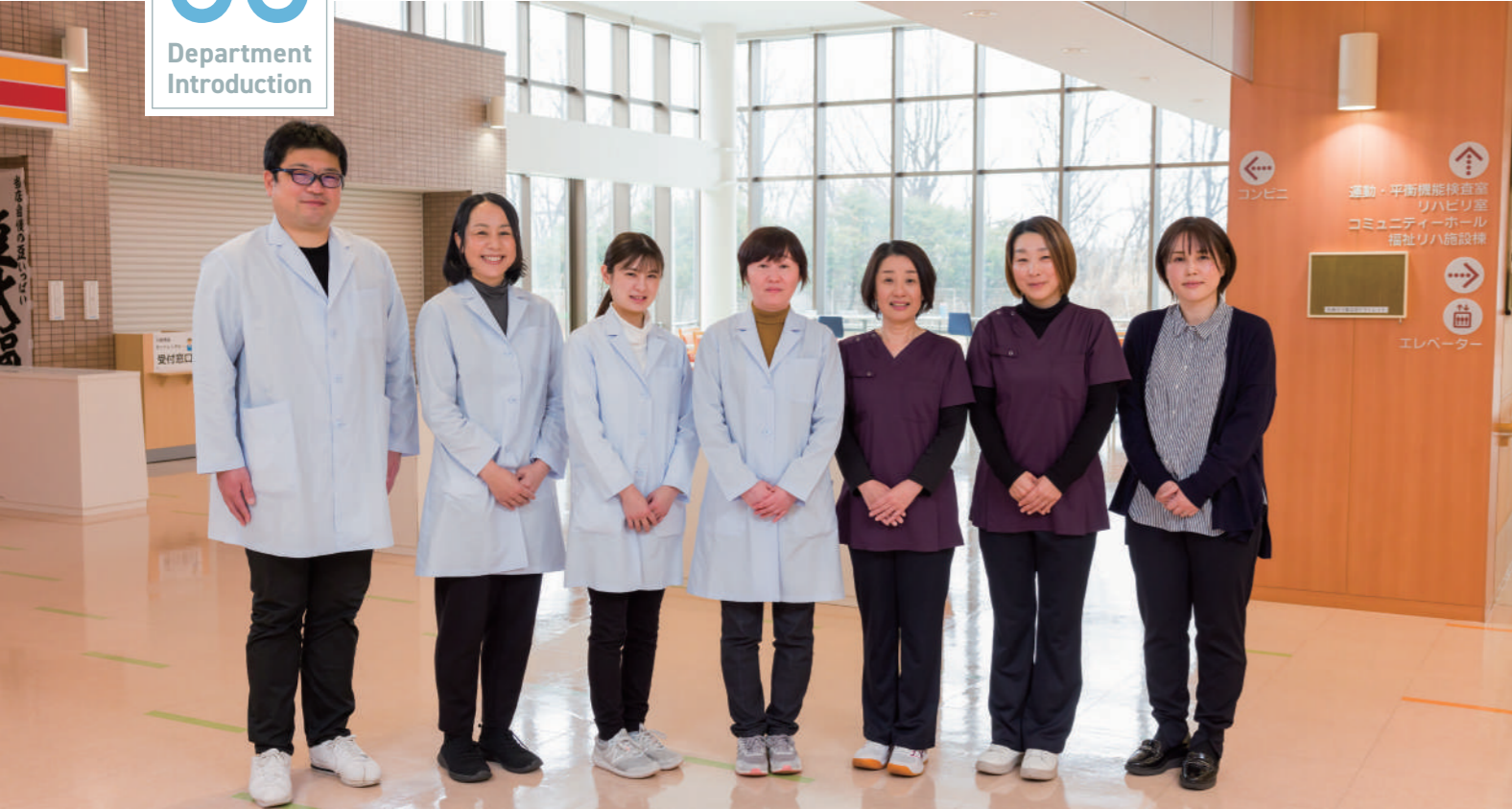
#### 教育担当

看護部教育では、教育理念に「専門職業人として自立した信頼される質の高い看護が提供できる看護職員の育成」を掲げ、新人職員に必要な知識・技術の習得支援、専門職として求められる継続学習支援、実習等の受け入れ、研修企画・運営などの役割を担っています。教育システムとして、キャリアラダー制度やプリセプター制度を導入し、教育年間プログラムに沿って、eラーニングを活用しながら自立した看護職員の育成に取り組んでいます。

回復期リハビリ看護・介護職員としての知識・技術・姿勢を身に付け、ひとりひとりの看護観やケアへの想いを大切にしながら看護・介護が提供できるよう、共に育つ「共育」の実践を目指します。

## 地域連携推進部

Regional Collaboration Promotion Department



### 地域連携課

地域連携課は大きく2つの業務「前方連携」と「後方連携」を看護師2名と事務職員1名(兼務)で行っています。前方連携(入院の相談から入院までの調整)は日常生活動作に介助が必要な患者様が入院後スムーズにリハビリテーションを受けられるよう、急性期病院からの情報を集め院内に伝達しています。後方連携は「退院支援看護師」として医療行為が必要な患者様が必要な医療が自宅に戻っても安全に受けられるように調整を行っています。一人でも多くの方に中伊豆リハビリテーションセンターのリハビリテーションを受けて頂けるように丁寧な対応を心がけています。



### 医療福祉支援課

私たち医療ソーシャルワーカーは、医療機関における福祉の専門職として、病気になった患者様やご家族に社会福祉の立場から支援を行ないます。回復期リハ病棟入院患者様への支援が主業務となり、突然の病気や怪我により生じる混乱や様々な不安について相談をお受けし、生活を再開、又は新たな生活の形を作り上げていけるよう、問題を一緒に考え、解決へのお手伝いをしています。現在5名の医療ソーシャルワーカー(社会福祉士)が在籍し、2つの回復期リハ病棟の患者様の担当と外来患者様等の対応をしています。



### 地域貢献室・地域リハ支援課の概要

令和元年度より設置された地域貢献室は、当センターの理念・経営方針であるリハビリテーションのノウハウを地域に還元するといった社会貢献事業を企画・実施しています。

#### 〈JA介護ノウハウ提供活動〉

当センターは2007(平成19)年より、JA共済連地域貢献活動の一環として介護事業を行っているJAに対し、リハビリ専門職が介護ノウハウ等の提供活動等を実施しています。また、2016(平成28)年からは日本の高齢化の課題に対し、介護事業に携わっていないJAやJAの活動組織等に対しても、健康寿命の延伸を目的に講習を実施しています。

#### 〈その他の地域貢献活動〉

○地域リハビリテーション広域支援センターを受託し、リハビリテーションの情報発信・啓発を目的に研修会等を実施。また、地域へのリハビリ専門職の人材派遣調整を実施。

○市町事業への支援(伊豆市・伊豆の国市)

- 介護予防・重度化防止事業
- 一般介護予防事業
- 訪問サービスC事業 等

○地域医療講演会を伊豆市・伊豆の国市・伊東市を中心に、健康寿命の延伸・介護予防に関する講習会を実施。

○伊豆市シルバー人材センター登録者に対し、就労期間延長に関する啓発活動を実施。





訪問看護ステーションあおぞら



訪問看護ステーションあおぞら伊豆



中伊豆リハビリテーションセンターに、『訪問看護ステーションあおぞら』が、開設されたのは、平成10年3月、今から26年前です。私が入社当時のあおぞらの職員は看護師6名、セラピスト常4名の計10名でした。当時あおぞらの所長は、山口部長でした。入社したばかりの私を連れ、関係機関へ挨拶まわりをした事を思い出します。

平成28年4月に、伊豆出張所が開設されました。当時は、人員不足により看護師を常駐させることが出来ず、長泉の看護師が伊豆地区に出向き、サービスを提供していました。平成30年4月ようやく看護師1名を常駐させることができ、その後は順調に利用者が増加していきました。そして、令和4年4月には看護師5名、セラピスト3名、事務職員1名を配置し、『訪問看護ステーションあおぞら伊豆』としてステーション化することが出来ました。

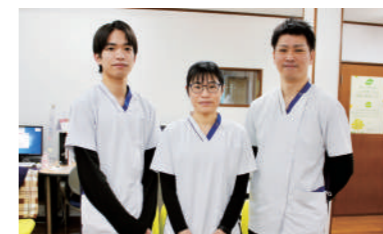
『訪問看護ステーションあおぞら』は、令和6年1月現在、看護師7名、セラピスト5名、事務職員1名の計13名です。利用者数は175名で、981件訪問しています。高齢者はもちろん、小児、難病、ターミナルケア等幅広く、サービスを提供しています。

これからも、永続的に地域を支え、利用者に愛される事業所を目指して頑張ります。



平成28年4月に訪問看護ステーションあおぞらの出張所として看護師1名、理学療法士1名の訪問から始まり、7年の時を経て看護師6名、療法士3名、事務員1名の訪問看護ステーションに大きく成長しました。スタッフは個性豊かな若者からベテランで構成されており、利用者の想いに寄り添うべく、どうしたら自宅での生活が継続できるのか、もっと過ごしやすくする方法はないか、本当にこれ以上のことはできないのか等々、職員みんなの知識と技術と経験をフルに活用して看護・リハビリを提供しています。利用者の半数は80歳後半から100歳代の高齢者が占めており、出会いと別れを繰り返す中で色々な人間模様があり、その人らしい生活について学ぶことも多く、人として成長させていただいています。

まだまだ自宅で医療・看護・リハビリが受けられることを知らない方は多く、訪問看護ステーションを知っていただけるように地域の方々へ発信をしていく必要があります。また、「あおぞら伊豆」でよかったと思っていただくために、利用者・家族だけでなく関係者への丁寧かつ迅速な対応、根拠に基づいた看護・リハビリの提供が継続できるように努めます。



# 福祉部

Welfare Department



## 障害者支援施設わかば



私たちは障害者総合支援法の枠組みの中で利用者様に対し『生活介護・施設入所支援・短期入所』の障害福祉サービスを提供しています。利用者様の個々の意思及び人格を尊重し常に相手の立場に立ち、意向、趣向、障害の特性、その他の事情を踏まえた支援内容を実践しています。

利用者が地域や社会の一員として自立した生活が送れる様に自己決定の尊重とリハビリテーションの視点をもって支援し安心して安全な生活環境を提供する事に努めています。

また、常に提供するサービスの質の評価と改善を行い質の向上を図り、職員は各領域において高水準の専門的能力を持ち幅広い知識、教養、常識を備えもって支援を実施し利用者様と強い信頼関係が築ける様に最大限の努力をします。

## 障害者支援施設さわらび



障害者支援施設さわらびは、中伊豆リハビリテーションセンターの歴史と共に歩んできました。

「障害があっても、自分らしく生きたい」に寄り添い、健康面・生活面・機能面など多方面から、利用者一人ひとりの自立に向けた支援を展開しています。



就労継続支援事業所あゆみ



相談支援課 障害者生活支援センターなかいずりハ



就労継続支援事業所あゆみは、地域で生活している障害をお持ちの方の『働きたい』『社会に参加したい』という願いをかなえる通所型の事業所です。

当初は(入所型授産施設)として生活と労働を一体的に支援するという形態でしたが、「働くこと」と「生活すること」を分けて考える制度に変わり、H23年には(就労継続支援B型事業所)として、「働くこと」を支援する事業所になりました。

現在、9名の職員が配属されており、そのうち障害をお持ちの方が3名職員として働いています。あゆみでは、全ての利用者が従事できる作業内容を整えると同時に作業に関する具体的な目標・工賃目標・事業開拓・将来構想を明確にできるよう取り組んでいます。

これからも、一人一人の利用者の働きたいニーズを実現するために、福祉的な視点のみでなく、労働に関する知識や情報収集を行い、障害があっても働けることを利用者自身と社会に発信できる事業展開をしていきたいと考えております。



相談支援課は「障害者生活支援センターなかいずりハ」の事業運営と福祉部(わかば・さわらび・あゆみ・なかいずりハ)の請求等の事務業務を担当し、相談支援専門員4名と事務担当2名(うち1名は伊東の丘事務課との兼務)が所属しています。

「障害者生活支援センターなかいずりハ」では平成18年より伊豆市、伊東市、熱海市、東伊豆町から委託を受け相談支援事業を行っており、平成24年に特定相談支援事業所、平成25年に一般相談支援事業所の指定を受けています。

わたしたち相談支援専門員は、障がいやその疑いがある方が自分らしく安心して暮らすことができるように想いに寄り添い、一緒に考え、地域の関係機関等と協働しながら、生活のサポートを行っています。自立支援協議会などにも積極的に参加し、地域づくりの取り組みにも参画しています。

また平成24年より静岡県から高次脳機能障害支援普及事業を受託しています。現在は駿東田方・熱海伊東圏域の高次脳機能障害支援拠点機関として相談支援コーディネーターを配置し、高次脳機能障害に関する相談支援や関係機関とのネットワークの構築、研修の企画や実施などを行っています。

これからも利用者様や地域に必要とされる事業所として、ニーズや社会の変化に柔軟に対応し丁寧な支援を提供いたします。



福祉医務課



伊東の丘事務課



福祉部医務課は障害者支援施設に入所されている利用者様の健康に関する支援に携わっている部署です。ここで働く看護師は10名に満たない人数ですが、様々な医療及び介護分野で看護師職を経験した仲間が「元気!」「笑顔!」で働いています。

日々の仕事は服薬管理、経管栄養、胃腸部や皮膚のケア、褥瘡処置、年2回の健康診断、受診支援、利用者様の体調変動時の状態観察と医療処置といった「健康管理」がおもになります。また、インフルエンザや新型コロナウイルス感染症、ウイルス性胃腸炎などの「感染症対策」は、医療職として中心的に他職種と連携しながら対応をしています。利用者様の日常的な場面においても、食事場から嚥下機能の変化や日常生活の様子で認知機能や運動機能のチェック、持病の変化を観察しながら医療・看護的な視点からサポートを心がけています。利用者様にとって、ここ障害者支援施設は「利用者さんの生活の場」です。その方らしい生活(暮らし)と想いを支えるために、ご本人の希望や生きがい・心の安らぎを配慮したケアが求められます。看護師にとって、ケアの継続は介護職スタッフとの連携・役割分担は大切なポイントになります。チームの一員として他職種と連携しながら、医療職としての職能を発揮していきたいと思っています。



伊東の丘事務課は2名のスタッフで伊東の丘事業部内の事務処理およびそれに関連した情報機器に関する整備と管理、ホームページを通じた情報発信、建物全体および周辺敷地の維持管理、防災や安全運転管理、外部委託している自動車運行に関する管理、令和元年度から実施している「地域における公益的取組」を取りまとめる業務を行っております。

また利用者の皆さんが安心・快適な利用が出来るよう必要に応じて業務のサポートを実施するとともにその業務サポート等を通じて職員の皆さんが働きやすい環境、各部署が円滑な業務遂行ができる環境が整うよう努めています。

障害者支援施設伊東の丘いずみ

伊東の丘いずみは、心身に障害のある方に対して、日常生活や社会参加の支援を行っています。食事や入浴、排泄などの生活介助に加え、レクリエーションや外出、必要に応じた地域移行などの生活支援を提供しています。また、利用者の個性や能力に応じて、自立や自己表現の促進を目指しています。50周年という長い歴史の中、諸先輩方のご尽力や、残してきた功績を受け継ぐと共に、時代に合わせた変化を受け入れながら、これからも絶えず成長し続ける組織を目指していきたいと思っています。今後も、農協共済中伊豆リハビリテーションセンターとともに、地域・障害者の方々の幸せな生活を支えていきたいと思っています。





## 通所介護伊東の丘きらめき



通所介護きらめきとなり8年が経過しようとしています。伊東の丘開設以来、通所サービスとして中伊豆で運営していた“やすらぎ”のノウハウを継承し、伊東市在住の方を対象とし、伊東の地でサービスを継続してきました。通所リハビリから通所介護へと転換しましたが、大事にしていることは変わらず現在まで進めてきました。住み慣れた場所でいきいきと生活が継続できるように外へ出かけ、人に会い、体を動かす大切な機会(場所)として心地よく使っていただけるようこれからも職員一同力を合わせていきます。

### 【1日コース】

7時間の利用時間を活用し日常生活上の支援が必要な方を中心にご利用いただけるよう、必要な人員を配置し環境を整えています。中重度(要介護3-5)の利用者の方でもできるだけご自身の力を発揮して活動ができるようプログラムを工夫してきました。今後も自分から動き出したいくなる仕掛けづくりにさらに磨きをかけていきます。また声掛け、誘導、見守りなどその方に合わせた必要なサポートを実施し、利用者の皆さんの活動を支援していきます。



### 【半日コース】

3時間のコースで、1日では長いと感じる方、生活リズムをできるだけ崩さず利用したい方、身の回りのことはできるが外出や家事など応用的な動作に課題がある方が多く利用されています。目的意識を持ち、集中して課題に取り組みたい方が多く、自主性、やる気が伝わってきます。職員は直接的な介助というよりも、近況を伺いご本人の取り組みについての助言や進捗の確認をすることで支援をさせていただいています。



## 訪問看護ステーションそよかぜ



訪問看護ステーションそよかぜは伊東市で一番古い訪問看護ステーションとして地域に密着し、迅速な対応と利用者様、ご家族の意思を尊重し関係性を深め利用者様と家族、当職員みんなが笑顔で過ごせるステーションをモットーにしています。

看護職員は9名在籍しており医療処置やターミナルケア、在宅で安心して生活できるように支援しています。リハビリにおいては理学療法士4名や作業療法士2名、言語聴覚士1名が在籍しています。より専門的な資格を有したスタッフも多く、また地域リハビリテーション推進員の資格を持ったスタッフもいますので、質の高いリハビリ支援が行えます。



## 訪問看護ステーションそよかぜ熱海サテライト

訪問看護ステーションそよかぜ熱海サテライトは理学療法士2名(脊髄障害認定理学療法士1名)、作業療法士1名の経験豊富な3名で和気満々としながら仕事をしています。

熱海市内全域を対象地域の介護保険、医療保険の方を対象としています。病気や怪我で要支援・介護の認定を受けた方から難病や重度障害(児)や、がん等の在宅療養が必要な方に専門的な知識・技術に基づいてリハビリテーションを提供させて頂いています。

また、リハビリのみでなく様々な在宅生活の問題点について相談を受けています。利用者様を取り巻く居宅事業所や各医療機関と連携しながら問題を解決していき在宅生活をより良くできるよう努力しています。





### 伊東の丘ヘルパーステーション

当事業所は、11名の介護福祉士、3名の介護士の14名で稼働しており、利用者様が可能な限り自宅で自立した日常生活を送ることができるよう、自宅を訪問し、食事・排泄・入浴などの介護(身体介護)や、掃除・洗濯・買い物・調理などの生活の支援(生活援助)を提供しています。また、介護保険では対応できない自費のサービスや、視覚に障害を持つ方々の同行援護(障害者支援サービス)にも対応しております。同行援護に関しては現在熱海から稲取までの地域を6名の有資格者のスタッフが対応しております。



### 居宅介護支援事業所



訪問看護ステーション併設の居宅介護支援事業所です。利用者様の心身の状態、ご家族の状況を考えてサービス計画を作成し、出来る限り迅速に対応できるよう心掛けています。

設立法人が病院併設の社会福祉法人のため、医療度の高い対応が可能となっており、病院を退院して在宅に戻る方の状態把握もスムーズに行う事ができます。また、訪問介護事業所、通所介護も併設しているため各職種と密に連携を取り包括的な支援を行っています。

今後は、かかりつけ医、連携する病院とネットを通じたシステムで情報を共有し、更なる連携強化を図る事で利用者様が思い描く在宅生活を支援できるよう努めます。



## 中伊豆リハビリテーションセンター 50周年記念誌

●発行:2024年3月31日

●企画・制作:中伊豆リハビリテーションセンター

※本書を無断で複写・複製することを禁じます。